

創世記2：1-25「規則はたったひとつの完ぺきな関係」

2:1 こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。2:2 神は第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。2:3 神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。2:4 これは天と地が創造されたときの経緯である。神である【主】が地と天を造られたとき、2:5 地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である【主】が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。2:6 ただ、水が地から湧き出て、土地の全面を潤していた。2:7 神である【主】は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。2:8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。2:9 神である【主】は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた。2:10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。2:11 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れる。そこには金があった。2:12 その地の金は、良質で、また、そこにはベドラハとしまめのうもあった。2:13 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れる。2:14 第三の川の名はティグリス。それはアシュルの東を流れる。第四の川、それはユーフラテスである。2:15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。2:16 神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」2:18 神である【主】は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」2:19 神である【主】は土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造り、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生き物につける名はみな、それがその名となった。2:20 人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。2:21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。2:23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」2:24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。2:25 人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

導入

先週は、創世記1章から、一週間でなされた神の偉大な創造の業について学びました。今週は、2章のおもなポイントを押さえていきたいと思えます。

この2章で、3つ注目したいポイントがあります。まず、神による創造の7日目が休息と内省の日定められたこと、そして次に、男性と女性の創造です。これについては先週少し触れました。最後に、神が人に対して禁じられたたったひとつのことと、唯一の規則に背いた場合の結果についてです。

1. 7日目が休息と内省の日と定められる。(1-3節)

神は、一週間の創造を6日間で完成されましたが、神の創造の一週間には7日目があると聖書は語ります。神はこの7日目を休息の日と定められました。3節には、神がこの休息の日を聖なる日とされたとあります。

この休息の日の意味を理解することが大切です。

神がお造りになったすばらしい世界にあるすべてのものは、人のためになるものです。それは、休息の日も同じです。

まず私たちが知るべきことは、7日間に1日休みを取るのは、人間が心身ともに健全であるためです。

体の健康促進のために多くの研究がなされています。研究の結果、学者たちが一様に同意するのは、6日間働いて1日休むというサイクルが人間の体にもっとも適しているということです。

この約2000年間、西洋諸国では7日間のうち1日24時間の休みを取るというパターンが守られてきました。しかし、過去40年ほど、米国を含む多くの国でこの慣わしが崩れてきました。その結果、これらの国ではうつ状態に陥る人や、ストレスで起こると見られる原因不明の症状を訴える人々が増えました。

近年の調査によると、うつやストレスが原因の症例がもっとも多いのは米国で、次いで日本だといわれます。

ですから、7日間のうち1日を「完全な休息」の日とするのは健康のためにとっても大切なことなのです。

私たちの体をお造りになったのは神ですから、何が体に一番良いかをご存じであるはずで

す。休息の取り方は人によってさまざまです。6日間どのような仕事をしているか、6日間の過ごし方によっても違ってきます。

事務職の人は、休みの日に体を動かしたいと思うかもしれません。プロアスリートなら、休みの日はカフェでゆっくり本を読んだり、家で映画を見たりして過ごしたいかもしれません。一番リラックスできる方法で過ごすということです。

大切なのは、健康のために7日間に1日休みを取ることです。

出エジプト23：10-12には、7日間のうち1日の休みは、神の民だけでなく、家畜や奴隷も休ませよう神が命じられたとあります。

昔、これが本当に重要かどうか試した人がいました。ロバに荷物を載せ、3週間の旅に出たのです。そのうち3頭は休みを与えず旅路を進ませました。そうすれば、他のロバより3日間はやく目的地に到着する計算になります。

ところが、まったく逆のことが起こりました。

休みを与えられたロバのほうが3日間はやく目的地に到着したのです。休みを得たことで疲れが取れて、次の週も元気に進むことができたからです。

7日間休むことなく旅をさせられたロバは、2週目で疲れてしまい、進むスピードが遅くなりました。3週目に入ると、そのスピードはさらに落ち、休みを得たロバに追い越されてしまいました。

人は、神などいなくても自分たちの知恵で十分だと思いがちですが、最終的には、神のみことばがすべてにまさる知恵です。

休息の日のふたつめの目的は、私たちの霊が健全であるためです。

出エジプト20：8にある十戒を見てみましょう。

出エジプト 20:8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

旧約聖書のユダヤ人にとって、安息日は神のふたつの業を覚える日でした。

まず、神の創造です。次に、贖いです。

11節で、人々はこの日を覚え、神の創造の業を思いなさいと命じられました。

休息の日には、何らかのかたちで神の創造の業を覚えなければなりません。

申命記8：11-18は次のように警告します。

申命記8：11-18

8:11 気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、【主】を忘れることがないように。 8:12 あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、 8:13 あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、 8:14 あなたの心が高ぶり、あなたの神、【主】を忘れる、そういうことがないように。——主は、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出し、 8:15 燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、 8:16 あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。それは、あなたを苦しめ、あなたを試み、ついには、あなたをしあわせにするためであった—— 8:17 あなたは心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ」と言わないように気をつけなさい。 8:18 あなたの神、【主】を心に据えなさい。主があなたに富を築き上げる力を与えられるのは、あなたの先祖たちに誓った契約を今日のとおり果たされるためである。

私たちの住む社会は、創造主なる神がいなくてもじゅうぶんやっているといたいのです。しかし、私たちの身の回りのものも、私たちの存在自体も、すべては創造主なる神のおかげだと聖書は明言します。私たちはそのことを忘れて、自らを危険にさらします。

休息の日、または安息日のふたつめの意味は、申命記5：12-15にも記されています。

申命記5：12-15

5:12 安息日を守って、これを聖なる日とせよ。あなたの神、【主】が命じられたとおりに。 5:13 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。 5:14 しかし七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘も、あなたの男奴隷や女奴隷も、あなたの牛、ろばも、あなたのどんな家畜も、またあなたの町囲みのうちにいる在留異国人も——そうすれば、あなたの男奴隷も、女奴隷も、あなたと同じように休むことができる。 5:15 あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、【主】が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、【主】は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。

律法が改めて語られた際、この掟に重要な事柄が追加されました。

その重要な事柄とは、神の贖いに注目することです。

神のご性質を理解せずに、贖いをじゅうぶん理解することはできません。

神は罪を憎まれますが、罪人の友になることを望まれます。

イスラエルの民のエジプト脱出が可能になったのは、エジプト全土で長子が殺されるという犠牲があつてのことです。ユダヤ人家庭は、門柱とかもいに汚れのない雄の子羊の血を塗ることで、その難から守られました。

神は、このことを覚える日を特別に定められました。

同様に、すべてのクリスチャンが贖われた経験を覚えることを神は望まれます。私たちは、エジプトの奴隷生活からの解放ではなく、永遠の死と罰から救い出されました。

これが、OICで毎月聖餐式に与る理由です。私たちがイエスをとおして救われたこと、つまり贖いを忘れないためです。

私たちは、主イエスの死を週に一度思い出すべきです。

私は毎週のメッセージのどこかに、そのことを組み込むよう努めています。イエス・キリストが私たちのために払ってくださった犠牲を毎週覚えることは大切だからです。

神は、7日間のうちに1日、特別な日を作ってくださいました。それは、私たちの体が安まって元気を取り戻すためです。また、神の創造に思いを巡らし、御子イエスをとおして贖われたことを覚えることで、私たちのたましいも元気になるためです。

さまざまな理由で日曜日に働く人たちに、ビクトリア朝時代の有名なイギリス小説「黒馬物語」からお話を紹介したいと思います。

主人公の馬ブラック・ビューティーは、その生涯の最後の一年、ロンドンで辻馬車（当時のタクシー）をひく仕事をしました。自動車がまだなかった時代、馬車は人々の交通手段でした。皆さんも、アメリカやイギリスが舞台の映画などでそのようなシーンを見たことがあると思います。

ブラック・ビューティーの所有者は、辻馬車屋のジェリー・バーカーでした。あるときジェリーは、同じく辻馬車屋をしていたラリーと会話を交わします。

ラリーは、「日曜日に休んではいられない。儲けなければならないし、教会に行く人たちがお気に入りの説教者のところに行けるよう乗せてあげないといけないから」とジェリーに言いました。

ジェリーは高潔な人だったので、日曜日に休みを取ることの大切さを力説しました。

ジェリーは言いました。「正しいことなら、できるはずだ。間違ったことなら、しなくてもいいはずだ。」

そして、続けました。「善良な人間はその方法を見つける。それは、辻馬車屋でも教会に行くのが好きな人でも同じだ。」

「正しいことなら、できるはずだ。間違ったことなら、しなくてもいいはずだ。」これは、今私たちが話している内容にも適用できる原則です。

では、創世記2章のふたつめのポイントに進みましょう。男性が造られたことと、男性から女性が造られたことです。

2. 男女の創造（7節、18節、21-24節）

先週の学びで、1章27節に注目しました。そこには、神が人をご自身のかたちに造られたとあります。ここでいうかたちとは、精神的、道徳的、社会的特徴を指します。

今日は、男性と女性の役割と、男女をお造りになった際の神の目的について、どのように記されているかに注目したいと思います。

まず、7節を読むと、男がちりから造られ、神の息を吹き込まれて生きものとなったことがわかります。ですから、人は物質であると同時に霊なのです。

聖書は8節で、神が園を造って人をそこに置かれたと語ります。

次に、その園は見るからに快適で、じゅうぶんな食料があったとあります。

15節には、神が人に園を耕させ、守らせたとあります。その園は「エデン」と呼ばれました。エデンという単語には、喜びや楽しみという意味があります。

神がアダムに働いて園を守るよう命じられたのは、アダムが罪を犯す前です。ですから、「仕事」は罰ではなく、人間の存在意義の一部です。どのような「仕事」も、この地上に生きる人間に対して神が意図されたものです。

こういうわけで、人は失業して就職先が見つからないと、落ち込んでしまいます。充実感を得られないのです。神が意図されたように動けないと、気落ちしたり物足りなさを感じたりするのは当然です。

私はこの20年間、失業して元気をなくした多くの人たちから相談を受けました。私は常に、失業期間中、できるだけボランティアなどの奉仕活動に参加するよう勧めてきました。こうすることで、気分転換になるだけでなく、重労働をいとわない働き者であることを、雇用者になる立場の人たちに知ってもらえるからです。失業期間が長ければ長いほど、仕事を見つけるのは難しくなります。たいていの雇用者は、長期間失業していることをネガティブに捉えるからです。

定年退職も、退職後に嘱託などの仕事に就かないとつらいかもしれません。日本は、定年退職した年配者に就労のチャンスが与えられた数少ない国のひとつです。定年退職者にとっては、日本の就労環境のポジティブな一面です。

給料がそれほどよくなくても、神の目的を果たす一環として、私たちが働くことを神は望まれます。

ただし、さきほどの個所からわかるように、神は私たちが園を耕すことだけを望んでおられるわけではありません。園の管理をすることも望まれます。

「耕す」「守る」と訳されたヘブル語の単語には、「育てる」という意味があります。

神は人に、被造物の「世話をする」という管理監督の役割を与えられました。

19-20節には、神はご自身がお造りになった動物をアダムのところに連れて来て、アダムに名付けさせたとあります。アダムが名付けた名前は何でも、神が認めてくださいました。神とアダムとの間には、互いを尊重する信頼関係がありました。神はアダムに役割を与え、アダムがその役割を果たすと信頼しておられました。

これは、人の知性や知識の証です。また、神が人に権限を与えることを望まれた証です。

では、18節を見ましょう。ここで、神はもうひとりの人をお造りになります。

18節には、神がなぜもうひとりの人を造ろうと決心されたかが記されています。

そこには、アダムがひとりであるのは良くないからだとあります。神は、人と同類であり、人の助け手として行動してくれるもうひとりの人を造ることで、この問題を解決なさいました。

ここで「助け手」と訳されたヘブル語の単語は、「助けを受ける人の補完的役割を果たす人」という意味です。

その単語は、助け手が男より弱いとも強いとも語りません。ここでは、男の良さを引き出し、補ってくれる人という意味です。21-24節には、神がこのふたりめの人をお造りになった方法が記されています。

2:21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。2:23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」2:24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

こうして神は、ひとりの人からふたりの人をお造りになりました。これは、ふたりがまたひとりとなるためです。

マタイ19：4-6で、イエスは創世記2：24を引用し、神の結婚観を示されます。この引用は見逃してはいけない重要な部分です。というのも、イエスが創世記を認めておられることもここからわかるからです。

神は、ひとつであると同時に異なるふたりの人をお造りになりました。それは、ふたりが互いに補い合うためです。神は、ふたりが特別な結びつきを持つように選ばれました。また、被造物を管理する権限と責任を男に与え、かしらとして定められました。

さて、創世記2章の最後の重要な部分に進みましょう。アダムがエデンの園で神と仲良く暮らすために神が定められた条件とそれを破った場合の結果です。

3. 神が造られた園に暮らす条件 (16-17節)

この世は、多くの規則や規定に制限されています。そして、毎年その数は増加する一方です。昨年一年で、テキサス州だけでも新しい法律が50も制定されました。その内容は、高速道路から農業に至るまでさまざまです。しかし、神が人をお造りになったとき、与えられた規則はたったひとつでした。

これは驚くべきことです。たったひとつしか規則のない美しい世界に住めることを創造してみてください。

創世記2：16-17

2:16 神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

そこには、たったひとつの規則があり、それを破った際の結果もひとつです。

16節には、アダムは園のどの木から食べてもよいとあります。

9節から、アダムがいのちの木から食べることも許されていたことがわかります。アダムがいのちの木から食べるなら、永遠に生きることになりましたが、それは問題ではありませんでした。

しかし、アダムが善悪の知識の木から食べると、その結果、死ぬことになりました。

アダムは「善」を知っていました。それは、神がお造りになったすべてのものは「善」だったからです。

しかし、「悪」を知るのは別問題です。

アダムは、過ちを犯したことの無い完全な存在として造られました。

アダムの経験はすべて神の善という枠内に限られていました。

この一本の木の存在が、人間がロボットではない証でした。人間には選択肢がありました。その選択肢とは、食べるか食べないか、そして従うか、従わないか、というものでした。

選択肢があることで、「従う」という単語に意味が生まれます。

選択肢があるからこそ、偽りのない本物の関係が生まれるのです。

神はアダムとの関係性を試しておられたと言えるでしょう。

1章29節で、神がアダムに「すべて」を与えられたことがわかります。神は、地上のすべての木になるすべての実を食物としてアダムにお与えになりました。アダムは、あらゆる種類から好きなものを選んで食べることができました。唯一禁じられた善悪の知識の木の实のことなど、考える必要もなかったのです。

後になって神はアダムから女をお造りになりましたが、神がアダムに語られたときはまだアダムはひとりでした。ですから、善悪の知識の木から食べないという規則を守る責任はアダムにあったのです。

これで、創世記2章の大切な3つのポイントについてお話しました。この章から、どのようなことを私たちに当てはめることができるでしょうか。

適用

1. 休息の日を神が造られた。

毎週一日休みを取るのはとても大切です。日曜日に休めないなら、他の日に休む必要があります。日曜日に休めるなら、教会に来て、イエスをとおして救ってくださったことを神に感謝し、神の創造の業を覚えて神を称えるのが、休日のふさわしい過ごし方でしょう。

日曜日に教会に来られなくても、神に感謝する時間を取る必要があります。

休みの日に休息するのは、私たちの霊が神をたたえるためであり、私たちの体が休まるためです。このことを覚えて神に感謝しましょう。

これを怠ると、心身ともに何らかのかたちでダメージを受けます。

2. 神が造られた男性と女性それぞれの役割を認めなければならない。

今日学んだ箇所から、女性には男性の役割を補うという役割が与えられていることは明らかです。

これは、男性の思い付いたことではなく、神のお考えです。女性が男性の権威に反抗するなら、それは神の権威に反抗していることになります。男性と女性に別々の役割を定められたのは神ご自身だからです。

指導や責任といった役割を担おうとしない男性や、男性の役割に抵抗する女性が、現代社会における多くの問題を引き起こしています。

2011年の統計によると、米国の一人親家庭は1370万軒でした。その多くは、夫婦で子を育てるという責任を父親が放棄した結果です。

一方、2010年の統計によると、子を持つ母親の67%が職に就いていました。

シングルマザーやワーキングマザー、女性を妊娠させて逃げる男性などの状況については、情状酌量の余地があると思いますが、この50年ほどで、神が定められた男性と女性の立場がないがしろにされてきたことも事実です。

その結果に、男性も女性も苦しめられています。

約33年前、私たちの一番上の子が生まれたとき、ウェンディは子育てに専念し、私が家族を養うと夫婦で決めました。

約2年間はまったく収入がなく、15年間は低所得でしたが、神は私たちの決断を尊重してくださり、すべての必要を満たしてくださいました。

ですから、神は正しいお方だと心から言えます。神のご計画に反することをしようとしてもうまくいきません。

3. 神を尊重しない行動には結果が伴う。

神は霊の法則をお造りになりました。その法則を無視したり逆らったりすると、それには結果が伴います。最大の霊の法則は、「罪と死の法則」です。

ローマ6：23は、「罪から来る報酬は死です。」と語ります。

ローマ5：12は、「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」と語ります。

正直なところ、誰もが何らかのかたちで罪を犯したことがあります。神の十戒のどれかを破ったことがあります。私たちは有罪です。罪の結果を免れる道を見つけないければ、霊の永遠の死という罰を受けることになります。

しかし、良い知らせがあります。神は、私たちが罪の結果を免れる道を備えてくださいました。神は聖なるお方ですから、罪を罰さずにはおられません。ですから、私たちの罪も罰しなければなりません。

けれども神は、罰を免れる方法を与えてくださいました。その方法とは、神のひとり子イエス・キリストが天の栄光を離れてこの世に来てくださり、私たちの罪の罰を代わりに負ってくださることです。

イエスを信じて信仰を持つなら、罪の罰は消えませんが、イエス・キリストがそれを身代わりになって負ってくださいます。

イエスは、私たちの代わりに死んでくださいました。それは、私たちの罪に対する神の御怒りを私たちが免れるためです。

イエスを信じないなら、罪に対する神の罰が下ります。

今日、罪の罰から救ってくださる救い主としてイエス・キリストを信じませんか。

祈りましょう。